

平成29年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業  
(特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業)  
成果報告書

実施機関名 ( 玉 木 学 園 )

## 1. テーマ

- (1) 新設「附属中学部」における、特別支援教育の視点を中心とした学校経営の構築。
- (2) 中学～高校の6年間を見据えての、卒業後の社会的自立・共生を目指した「特別支援教育組織体制」の強化。

## 2. 問題意識・提案背景

- (1) 新設「附属中学部」であるが故の組織体制作り。
- (2) 平成21年度に開設した、「高校普通科共育コース」9年目の課題。
  - ア、社会性・協調性・コミュニケーション力の不足。
  - イ、基礎学力の不足。
  - ウ、自己理解の不十分さ。
- (3) 教職員の入れ替わりによる研修の必要性。

高校普通科共育コースの新入生は、年を追うごとに多彩さを増すばかりである。また今年度は教職員に7名の新規採用が有り、さらなる教職員の専門性の向上が必要となった。

## 3. 目的・目標

- (1) 附属中学部完成年度である平成31年度には組織の確実性としなやかさを備えた支援体制を構築するための基盤作り。
  - ア、専門家を活用した学校経営計画等の策定。
  - イ、合理的配慮の提供に係る体制整備の在り方に係る取組。
  - ウ、発達障害等の可能性のある児童生徒を取り巻くいじめの防止、不登校対策等の生徒指導上の学校課題に対する体制整備の在り方。
- (2) 中高連携の組織作り。
- (3) 教職員の専門性の向上



## 5. 教育委員会及び指定校における取組概要

### ① 専門家を活用した学校経営計画等の策定

(指定校の取組)

平成 29 年 10 月 19 日 (木) 第 1 回 運営協議会

平成 30 年 3 月 5 日 (金) 第 2 回 運営委員会

スーパーバイザー

長崎大学子ども心の医療・教育センター 副所長

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授 岩永竜一郎 氏

元公立中学校長 (退職後 本校に勤務)

平成 25～27 年度文科省「インクルーシブ教育システム構築事業」

合理的配慮協力員

本校学校評価委員・非常勤講師

横山 碩男 氏

別添資料②③ 参照

(主な成果)

- ・スーパーバイザーより指導・助言を受けることができ、多くの気づきや今後の課題が明確となった。生徒を中心に考え、中高連携型の良さを生かし、不安・混乱を軽減することができる学校経営の構築が必要だと痛感された。
- ・学校経営の有機的な流れを、多くの取組をとうして作っていくことが出来れば、本校の取組はさらに確固たるものになっていくと予想される。
- ・教育と医療の両面から推進し、さらに地域と連携する中で生徒一人ひとりの社会参加が促されることが痛感された。

## ② 合理的配慮の提供に係る体制整備の在り方

### (指定校の取組)

#### ア、授業担当者会

- ・話し合いを重ね、アセスメントに努めた。指導方法についてそれぞれの工夫について実践・振り返りを行った。

#### イ、土田 玲子 先生（感覚統合学会会長・NPO 法人理事長）

- ・附属中学部及び高校普通科共育コース 計7クラスの授業観察を行った。生徒の実態を踏まえての指導・助言をいただいている。

11月22日（水） 中学1年：社会                  高校1年：理科

11月29日（水） 高校3年：社会                  高校1年：英語

12月20日（水） 高校2年：体育                  高校3年：国語

#### ウ、峯 信幸 先生（長崎県立鶴南特別支援学校長）

- ・教職員の相談に対して指導・助言をいただいた。特別支援学校のセンター的機能を活用し、お互いに研修に行き学びを深めた。

### (主な成果)

- ・中学部を開設し全てが初めてであった。学校経営に関する基礎作りができた。
- ・日々の活動は目の前のことに追われ視野が狭くなりがちであるが、お互いの取組について発表しあう中で、新しい発見が生まれた。
- ・生徒理解に留まるだけでは、共育コース及び附属中学部の存在意義はないと考える。そこから一歩踏み込んで、どのような指導を重ねることで生徒の成長を促すことができるのか、チーム力をさらに増す必要性を痛感した。
- ・外部協力者は長崎県の特別支援教育を牽引されている方々である。その指摘・助言は的確であり、それらを受けて今私たちが出来ること、すぐにはできそうにはないが試みることのそれぞれを教職員自身が理解した。

### (課題)

- ・平成29年度の基礎作りを土台とし、さらに特別支援教育を中心とした学校経営構築が急務である。その中で、合理的配慮の提供に関する体制整備を高等学校と連携し行う。
- ・合理的配慮に関する専門的指導を受け、教員一人ひとりの専門性を高めることにより、より良い支援体制の強化を図る。

③ 発達障害等の可能性のある幼児児童生徒を取り巻くいじめの防止、不登校対策等の生徒指導上の学校課題に対する体制整備の在り方

(指定校の取組)

- ・開設1年目、在籍数5名と極めて少人数であるため、日々教員間で話し合いながら体制整備の地固めを行った。
- ・「道徳」の授業において、1学期に「SST」、2学期には「人権絵本 ちがいを豊かさに (大月書店)」を教材に取り組んだ。
- ・進学先である長崎玉成高校においては、「いじめ防止対策委員会」及び毎月「退学防止委員会」を開催。一人ひとりを細やかにみる取組をおこなった。

(主な成果)

- ・発達障害に特化したクラスにおいては、クラスメイト同志による問題も多く発生する。多様性を受容することは簡単ではなく、発達の偏りを有するだけに指導の難しさを痛感している。高校に入学してくる生徒たちは自分に自信がなく、自己理解も自己決定も難しい生徒が多い。学ぶことに諦めさえ感じられる時がある。絡んだ糸を根気強く紐解くような個別の指導を絶え間なく続けなくてはならない。その取組を一人の教員がするのではなく、チームとして普通に協力して、分担してやる体制ができつつある。
- ・スクールカウンセラー(3人)の見立てやアドバイスも欠かせぬものであった。カウンセラーから病院・支援センターにつないだ例も複数あった。また保護者支援という視点からみてもカウンセラーは必要不可欠であった。
- ・現在高校においては、長崎県発達障害者支援センター、長崎県子ども・女性・障害者支援センター、ハローワーク、長崎障害者職業センター、長崎大学病院、長崎大学、長崎発達支援親の会、長崎県子ども・若者総合相談センター等々の関係機関と10年を超えて連携している。それらの繋がりから、中学部の保護者に関しても、必要に応じた情報を提供している。

## 6. 今後の課題と対応

### (1) 平成 30 年度に第 2 回生 15 名を迎えての学校経営の構築。

本校の教育目標である「社会の要請に応える人間の育成を目指す」の具現化に向けて、学校長の「年度方針」に基づき、特別支援教育を中心に据えた学校経営を行う。平成 30 年度は中学部専任教員も 5 名となる。校務分掌・生徒の委員会活動に高校との連携を図りながら組織体制を確立する。

1 回生 5 名に加えて、2 回生は 15 名ということで大きな変化の年となる。クラス全員、個別の配慮が必要な生徒である。

そこでまずは、

生徒・保護者との信頼関係を築き、寄り添う。



小学校・外部協力者・関係機関と連携を図り、アセスメント実施。



個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成



20 名という集団を生かした学校生活作り



成功・失敗体験の中での成長・自己理解

### (2) 地元長崎に密着した取組を通して、自立・社会参加を目指す。

ア、「学習」をどのようにアプローチし、個別に伸ばしていくか。

イ、体験をどうして、自分・他者に気付く。

ウ、自分の長所・短所に気付き、考える場面・体験の設定。

エ、「長崎」を知り、学びの中から地元で暮らすことの良さに気付く。

### (3) 教職員の専門性の向上。

個性的すぎるほどの 20 名を、温かく受け止め、的確に指導していくためには、まだまだ深い学びが必要である。発達障害の生徒と共に長く一緒に暮らしていくうちに、「これは特別なことではない。」と気付く。もう少し何かできることがあるのではないか。別な方法があるのではないか。もっと生徒たちが暮らしやすく、学びやすい、未来に希望がもてる何かがあるのではないか、と思う。そんな教員を一人でも多く増やしていく取組としなくてはならない。

まずは「教科会」の充実。 学習指導要領の改訂に伴う研修と発達障害に関する理解を同比率にて進める。

+

次に「生徒理解」。 どの生徒にどのような言葉かけがよいのか。

+

当事者の思い・親の思いを直接聞き、受け止める。

+

そして「クラス」という集団の中で、認め合い時として支えあう集団作り。

↓

生徒と共に、保護者と共に、地域の中で生きる教育活動

## 別添資料①

### H29年度 長崎市中学校特別支援教育 通級部会

#### アンケート結果

#### 質問内容『日々の取組の中で嬉しかったこと・苦労していること』

##### 【嬉しかったこと】

- ・なかなか学習に対して消極的で意欲的ではない生徒が通級の学習活動の中でできる喜びを感じるようになり、毎時間笑顔で教室で待ってくれるようになったこと。
- ・お話タイムの中で、さまざまな思いや考えを聞くことができること。
- ・1・2回の取組（訓練、練習）では、なかなかできるようになることが少ない生徒が、根気強く繰り返し取り組み、できるようになった喜びを感じる。（ハサミが上手に使えるようになる。紐を上手に結べるようになる。漢字を覚える。等）
- ・小学校から不登校で、中学1,2年も登校できなかった生徒が、3年生になって通級に週2時間登校できるようになったこと。また、中1から不登校になった生徒が通級の日だけは登校している。2人とも進学を考えており、玉成高校の共育コースも視野に入れている。学習に対する意欲が向上してテスト前に教科書を読むなど、今までになかったことも見られた生徒が何人かいたことも良かった。
- ・通級に来て50分の最後に、お互い笑顔で「またね」と言えるとき。
- ・次の授業がんばろうという意欲を見せてくれるとき。
- ・他の生徒と学校行事において同様に活躍し、充実感を味わっている姿を見ることができたとき。
- ・通級にきて分かって楽しいといってくれること。
- ・学級集団での集団適応に難があり、自分の居場所として安心できること。
- ・通級に来ている生徒が、授業で分からなかったことが分かったと笑顔で言ってくれたとき。
- ・時間前にいそいそとやってきて、今日はここをやりたいと言ってきたとき。
- ・学習が嫌い、やる気のない生徒が少しでもやる気を見せがんばっている姿をみたとき。
- ・生徒の成長を感じられること。
- ・通級に通うことで自分の居場所を見つけ、学校生活で落ち着きを取り戻した生徒がいること。
- ・生徒が自分に自信をもてないでいる中、ほめたり、自分に合った課題をできたりして、うれしそうにしている姿を見るとき。
- ・個々のニーズが皆違うので、必要に応じた授業をどこまでできるかはいつも悩みながら行っているが、何かできるようになったときのうれしそうな姿を見ることがやはりうれしい。
- ・通常学級にも支援の必要があるだろう生徒がおり、生徒本人や保護者の理解がないために、必要な手立てや支援がされていない場合も多いので、担任や教科担当と相談をしながら入

級を進めており、入級して生徒がいい表情になったりトラブルが減ったと聞くことが何よりうれしい。いつか芽を出すかとも思いながら、大きな期待をせず生徒に関わろうと思う。

- ・子供が変容を見せるとき。通級に来て口を開かずに活動しないことが多かった子に絵本の読みきかせをしたら、ある日「今日はおれが読みます」と言って読んだ日があった。それから自発的な会話や活動にシフトしていったことは忘れられない。
- ・週に1回の通級の授業を楽しみにして来てくれる生徒がいることがうれしい。そういう生徒たちには、積極的に取り組むので成果が出やすい。といったループになってきている。
- ・人間関係から、なかなか教室に入れない、表情も良くない生徒が、通級の時間は時間前には教室に来て準備をしている姿を見ると、私もなんとか力になってあげたいと思うし笑顔にしてあげたいと思う。
- ・通級指導教室に来ていることで、生徒の日々の通常学級での授業態度が良くなったことを、担任や教科担任の先生から聞いたとき、成果が出たとき。
- ・通級指導教室で学習したことが、学習意欲につながったことを本人、保護者から聞いたとき。
- ・通級指導教室に通うことが本人の気持ちの安定につながり、本人の対応が改善したこと。

### 【苦勞していること】

- ・将来についてのビジョンを持たせるためにどんな支援ができるか。
- ・家庭生活での不安、不満をかかえている生徒への支援の在り方。保護者への働きかけの方法。
- ・発達障害についての保護者の理解、受容が難しいケースがある。
- ・自分の子供に対する期待が大きいため、学力に関する把握が難しく、進学先についても実力以上の希望校を選ぶケースがある。
- ・通級するのが恥ずかしいという理由でなかなか教室に来ない生徒がいること。来ないときは授業参観に行くが、それも嫌がる。親や本人と話もするがなかなか足が向かない。
- ・生徒についての地域住民の理解。
- ・自己認識をどうさせていくか。
- ・登校の不安定。
- ・進路保障
- ・SSTの学習法について、カードを使いながら話をしていくという方法や、こういうときにはどうするという多様な選択肢を考えさせる授業をしているが、多様な指導法を模索中で、これでいいのか不安。
- ・進路指導について、私立ということでお金がかかることに支障のある家庭もあり、迷っている。
- ・通級では1人しか助けられないというジレンマといつも戦っている。
- ・学習内容で苦勞している。どんなものが生徒に合っているのか、また、個々の時間割編成も難しい。
- ・自分の専門性の低さ。
- ・自分が特別支援教育の担当になって初めて、その身の苦勞がわかり、教員間の意識の差があること。
- ・「その子の特性に合った指導」の難しさ、今やっていることが本当にそれでいいのか迷い、不安なこと。
- ・通級は授業の時間を抜き出して行うので、理解を教員から得られないことが時々ある。生

徒の支援をしたい気持ちは同じはずだが、難しいと感じることが多い。また、週1時間程度の生徒との関わりになるので、生徒の変容がはっきりと分からなかったり、時間がかかる場合が多いので、いつも「これでいいのか？」と不安もある。学校に1人のある意味特別な立場なので悩みを理解してもらうことが難しい。

- ・通級に対するほかの職員の理解がなかなか進まない。(こちらの努力不足)
- ・保護者が子供の特性をうまく受容できていなかったり、家庭不和があったりして、その結果なのか子供が不穏になっているケースがある。また、学級担任が特性や支援について理解を示さないこともまれにあり、不適応は改善されないままということがある。
- ・個別の支援計画に基づいて、個別の授業準備をすることが大変。現在18名の生徒が在籍しており、学年も進度も違うので18通りの授業を各週に行っていかなければならないのは大変。しかし、生徒のがんばりや笑顔で全てチャラになります！
- ・生徒の実態把握のアセスメントの仕方。
- ・生徒個人、個人の対応した通級の授業内容について。

## 別添資料②

### 平成29年度 文部科学省委託事業

「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業」  
(特別支援教育の視点を踏まえた学校経営構築研究開発事業)

#### 第1回運営協議会実施報告

1日 時 平成29年10月19日(木) 13:00~15:15  
2時 程 13:00~ スーパーバイザーとの打合わせ  
13:25~ 授業参観 教科「国語」 附属中学部1年  
14:25~ 運営協議会

3 会議内容

- ・ 学校長挨拶「本校の取組について」
- ・ 特別支援教育コーディネーター「附属中学部のこれまでの取組について」報告
- ・ 指導・助言(スーパーバイザーより)
- ・ 質疑応答

<スーパーバイザーによる指導・助言>

▽岩永竜一郎先生

授業を参観して、子供たちが安心して登校出来ている雰囲気伝わってきた。

教員に対しての安心がある様だ。生徒と教員のよい関係がわかった。

授業の内容は生徒にとって、分かりやすい・やりやすいものだった。(板書・プリントも含めて)

他の中学だったら注意・指導を受け、学校が嫌になると思われる生徒にも、上手に対応してい

た。机間巡視も効率よく行っていた。

現在は、生徒数が少なく個別の対応も出来ているが、今後、生徒数が増えると問題点も出てくると予想される。今のような授業が出来るのか気になるところである。

#### ▽横山碩男先生

日常の子供の様子から観て授業をつくっていると感じた。

インクルーシブ教育が行われており、子供たちにとって効果的な授業であったと思う。

また、学級通信等を利用して、保護者とのパイプを繋ぎ理解を得ることは大切であるが、学級通信を毎週発行している点も評価できる。

家庭的な学級経営・学校の雰囲気を感じられた。

しかし、次年度以降、生徒数が増えた時が心配される。



授業参観の風景

#### < 質疑応答 >

##### Q：本校附属中学部教諭より

思春期の異性への関心・興味について（特に発達症の子供に対して。）、教員としてどのような対応をすればよいか教えてください。

##### A：岩永竜一郎先生回答

ADHD（衝動性が強い）は特に強く性への関心が出る場合が多い。

隠すことが下手という事もあるが、警察にお世話になる事例も少なくない。

行動が顕著な場合は、薬でコントロール出来るようなので、内服薬も含め医師に相談するとよ（コンサーターよりストラテラの方がコントロールの効果があるようだ）。

問題行動は、直後の指導のみではなく、その後のフォローアップが大切。（時間をあけて、同様の場面が想定される前に注意事項や守る事を伝える。その後褒める。これを1セットで行うとよい。）

一時的には良くなるが、良い状態が続くかわからないので、続けられるようサポートする必要がある。（専門の相談機関として長崎大学の宮原先生。）

##### Q：本校附属中学部養護教諭より

平成28年度より定期健康診断に「運動器検診」が加わった。

子供の有する身体的困難さや発達支援ニーズに気づき、支援開始の機会になるのではないかと考えています。その為に、検診はもちろんですが、その事前事後の準備等で注意すべき点等あれば教えてください。

## A：岩永竜一郎先生回答

発達性協調運動障害のある人の予後は6割、就労についていない人で8割がうつを発症するとのデータがある。機能をとらえ不器用さを見極めることが大切。現在行っている運動器検診の問診項目に加え、片足立ち・うつ伏せ・指先の協調性・見よう見まねができるか（幾つかのポーズをためしてみる。）・運動プランニング等の項目も別に行うとより不器用な点が見えてくる。不器用さは就労の妨げとなりうる。また、就労できたとしても、作業スピード等の困難さで離職するケースがある。早期の発見対応を行うことが理想的だと考える。

※DCDQ2007にチェック項目が記載してあるので参考にしてほしい。



## 別添資料③

### 第2回 運営協議会実施報告

1 日 時 平成30年3月5日（月） 13：25～15：00

2 会 場 本校視聴覚教室

#### 3 協議内容

①平成29年度の取組について

- ・取組における成果と課題の報告。

②平成30年度の取組について

- ・平成29年度の課題から、今後（平成30年度）の取組について報告。



【平成30年度研究テーマ】

『中学・高校連携校における特別支援教育の視点に基づく学校経営構築の在り方』  
～中・高のさらなる連携～

#### ③討議

「発達障害の傾向がみられる生徒への指導について ～日々の取組から～」

《スーパーバイザー》

岩永竜一郎 先生 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 教授  
長崎大学子どもの心の医療・教育センター 副所長

《スーパーバイザー》

横山 碩男 先生 元公立中学校校長  
h25～h27年度 文部科学省  
「インクルーシブ教育システム構築事業」合理的配慮協力員



質問：1年生 男子 ADHDの診断あり。コンサーターの服用の指示が出ているが内服していない様子。保護者は確認出来ていない様子。本人に確認すると不快な表情をする。どのように対応したらよいか。

助言：岩永先生

- ・自分の意志で薬を飲まない発達障害の子供は多い。主治医とよく話をし、薬の副作用と副作用（リスク）について本に伝えてもらう。また、学校から医師が伝えてほしい事がある場合もあるので、医師に学校側から相談してもよいと思う。  
薬の効果を、本人や保護者が再確認出来るよう検討することも必要。内服薬を使い始めるきっかけとして、周囲の都合（周りが困っている等）が多いが、それは本人の効果として伝わりにくい。本人にとってどのようなメリットがあったかが大切。
- ・ADHDの特徴として、見通しを立てることが難しいため、本人に分かるように図式にして伝える。（小さな積み重ねが大切。）また、周囲がそのことを理解しなければならない。
- ・内服薬の使用時に、一つ注意したいのが副作用。何らかの副作用があって、本人に身体的症状（頭痛やめまい・嘔吐等）があるようであれば自然と薬を避けるようになる。注意深く確認する必要がある。
- ・薬の内服確認は、保護者の目の前で飲ませる、また、学校で飲ませる等の方法もある。

質問：ADHD男子。クラスのムードメーカー。しかし、教員の一言一言に反応し、それによってクラス全体がざわつくきっかけとなる。  
クラスにも、診断がついている生徒も多く、クラス全体が落ち着かない。

担任が工夫し、絵で表記したものを作っているが、効果があったのは最初の2～3回だった。どのような手立てをしたらよいか。

助言：横山先生

- ・ADHDの生徒は影響力が強い。教員の立場からはとても困りネガティブな感情を持ってしまう。その子の良いところを見つけ、長い目でみて育てて欲しい。また、本人が孤立しないような学級経営を心掛け、本人に役割を持たせ自信をつけさせることも一つの方法。強制的な事は効果的ではない。(一時的にはよいが)リーダー的な役割を持たせることで、自信をつけさせることも大切。

助言：岩永先生

- ・往々にして、騒いだ後や何か事が起こった時に注意する事が多いが、何かを始める前(騒がしくなりそうな場面の前や、授業前等)に注意をしてから始めるとよい。やり始めたら褒める方が効果的。(やっていることをそのまま伝える。例：しっかり書けている。前を見て静かに話を聞いている等)。声掛けのタイミングが大切。ADHDの子供は、かまって欲しいと思う傾向があるので、問題行動を起こした時だけ声掛けをすると、かまって欲しくて問題行動を起こす。問題行動を起こしていない時に、定期的に声を掛ける事が大切。(問題行動を起こしていない時に、守っていることを褒める。)問題行動が起こるのが当たり前と考え、静かにしなければいけない場面の前後で必ず注意を促す。

質問：現在中学生は、宿題や掃除活動を素直に行っている。

しかし、高校生になったらやらなくなる子が多い気がする。

劣等感を持たせずに指導するにはどうすればよいか。

助言：横山先生

- ・発達心理に関わる問題。小学校はルールを守ろうとする。中学生頃は反抗期に入ってくる。高校生頃は不安定な時期で刹那主義にはしってしまう。子供の発達段階を大人が理解することが大切。ケースバイケースではあるが、生育歴や生活環境がこけるきっかけ、原因となる。こけた時に大人が手を差し伸べる。大人は見守る事が大切。

質問：書くことが苦手な子供に指導する事の難しさを感じている。

今後、どうしたらよいか。

助言：岩永先生

- ・読めることが出来れば、書けなくても何とかできると感じている。(PCやIpadを使う事もできる)しかし、書くための技、読むための術を身に付けておくことは必要。読む力はこれからも求められる。漢字を書くのは自分のペースでいい。ADHDの子供はたくさん書くと集中力が続かない。正しく書けたら2回でも認める。沢山書くとただ書くだけになり、覚えられないので、覚えさせたいのであれば、正しく書けば終わりとするやり方が効果的である。また、子供が気づいた時にもう一度行くと入りやすい。(能動的になった時に行うことが効果的。)
- ADHDの子供は机上での組立作業が苦手なことが多い。①読めるけど書けない子供には言語化して覚えさせる。(語呂合わせで覚えさせる。)。②ヒントを与えて(部首とつくりを分けて組み合わせる等)。可能であれば、文字は文字を教科は教科をと分けて教えた方がよい。

助言：横山先生

- ・ネーチャー誌に掲載されていたが、最近の研究で、発達障害は脳内タンパク質が欠損することで起こる事がわかってきた。現在研究中で将来的には治療薬も。

質問：今後の体制づくり（今後生徒が増えたあと）を具体的にどのように構築していけばよいか。

助言：横山先生

- ・大きな課題になると思う。先進校を参考に管理職と早めに検討する事が大切。組織図をつくるなどして、見て分かるようにした方がよい。細分化されて繋がりが見えてくる。

助言：岩永先生

- ・生徒の気持ちになって考えてほしい。小学校と中学校では全く違うので、特に発達症の子供は混乱し不登校となる傾向がある。中高連携のメリットはこの混乱が少ない。中学校でしていた支援をベースに高校での支援が出来る。

質問：学習や生活での課題が色々あるが、8割は生活面でのトラブルが多い。

中でもコミュニケーションでのトラブルが多い。

例) 特性が強い男子。医療機関は受診していない。小中ともにトラブルがあった。指導を受けている時は振り返る事が出来るが、忘れてしまう。他人の目を気にする事が多く、友人の言いなりになりやすい。

助言：岩永先生

- ・勘違いしやすく、思考が固い子供には丁寧な説明が必要。絵で描くなどして説明をした方がよい。(漫画のように吹き出しをつけて書く等)何も起こってない時でも、SSTを行いながら伝えることが大切。また、問題が起こってから伝えると反発することがあるので、何も起こっていない時の方が、子供には入っていきやすい。時間は掛かるがじっくり丁寧にやってほしい。



## 7. 指定校について（平成 29 年 5 月 1 日現在）

（中学校）

指定校名：長崎玉成高等学校附属中学部												
	第1学年				第2学年				第3学年			
	生徒数		学級数		生徒数		学級数		生徒数		学級数	
通常の学級	4		1		0		0		0		0	
特別支援学級	0		0		0		0		0		0	
通級による指導 (対象者数)	0		0		0		0		0		0	
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計
教職員数	兼 1	兼 1	0	2	1	0	3	1	1	兼3	0	13

\*特別支援教育コーディネーターの配置人数：1名

（高等学校）

指定校名：長崎玉成高等学校													
課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数				
全日制	普通科（1年医療系進学コース 2・3年総合コース）	6	1	16	1	13	1						
	普通科（共育コース）	53	2	39	2	27	2						
	生活技術科	14	1	15	1	26	1						
	医療福祉科	22	1	18	1	16	1						
	衛生看護科	38	1	47	1	45	1						
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育 支援員	スクール カウンセ ラー	その他	計	
教職員数	1	1	0	23	1	0	13	8	3	3	3	56	

\*特別支援教育コーディネーターの配置人数：3名

## 8. 問い合わせ先

組織名：学校法人 玉木学園

- |   |         |                |  |
|---|---------|----------------|--|
| ① | 担当部署    | 長崎玉成高等学校・附属中学部 |  |
| ② | 所在地     | 長崎玉成高等学校       | 長崎市愛宕 1-29-41  |
|   |         | 長崎玉成高等学校附属中学部  | 長崎市愛宕 1-37-1   |
| ③ | 電話番号    | 長崎玉成高等学校       | 095-826-6321   |
|   |         | 長崎玉成高等学校附属中学部  | 095-828-2120   |
| ④ | FAX番号   | 共通             | 095-828-6837   |
| ⑤ | メールアドレス | (代表)           | <a href="mailto:gakuen@tamaki.ac.jp">gakuen@tamaki.ac.jp</a>     |
|   |         | (担当者)          | <a href="mailto:gyokusei@tamaki.ac.jp">gyokusei@tamaki.ac.jp</a> |